

創作舞蹈資料

東京新聞社主催全国舞踊コンクール創作部第一位
「鐘によせる幻想」

上演日 初演 第二回「花柳千代の会」一九六八年（昭和四十三年・二月十七日）

再演 一九六八年度 東京新聞社主催全国舞踊コンクール・創作舞踊部門参加

その結果 創作舞踊部第一位・文部大臣賞受賞

高松宮賞受賞

劇場 国立小劇場

助演 花柳千代舞踊団 六名

スタッフ

構成 花柳 千代

作舞 花柳 千代

作曲 中能島欣一

美術 有賀 二郎

照明 遠山 静雄

備考

法隆寺をテーマにしたこの曲を聴いたとき、心身が震えました。中能島先生の名曲に巡り会い、仏教の六道を乗り越え救われる女人を表しました。

創作部で、日本舞踊の女流では初めて第一位文部大臣賞を、そして中でも優秀な作品に授与される高松宮賞も受賞しました。

日本の民俗芸能より

「廣濟寺鬼舞詞曲」

「鬼来迎」

（昭和四十五年度芸術祭優秀賞受賞）

上演日 初演 第四回「花柳千代の会」 一九六九年（昭和四十四年・十一月五日）

再演 第五回「花柳千代の会」 一九七〇年（昭和四十五年・十一月四日）

劇場 国立小劇場

助演 花柳千代舞踊団 三十一名・花柳演三朗

スタッフ

台本 関 稔

構成・演出 花柳千代

作舞 花柳千代

作曲 牧野由多可

美術 有賀二郎

照明 遠山静雄

備考

民俗芸能の好きな私は、本田安次先生より民俗芸能大会の招待をいただき、毎年拝見に参りました。この「鬼来迎」を見たとき、和讃に合わせ、地藏に助けられた子供達の姿に心を打たれ、涙が止まりませんでした。それから十年近く自分が会を持てるようになったら舞踊作品にしたいと温め、発表には千代門下が一丸となり作り上げました。

「子子」ぼうふり

上演日 第六回「花柳千代の会」 一九七三年（昭和四十八年・十月八日）

劇場 東横劇場

特別出演 西川喜久輔

助演 花柳千代舞踊団 七名

スタッフ

原作 三宅藤九郎

補作 横道万里雄

構成 花柳千代

台本 井川 健

作舞 花柳千代

作曲 杵屋正邦

美術 有賀二郎

照明 遠山静雄

備考

この作品も自分が会を持てるようになったら発表したいと、十年近く温めていました。狂言が土台となって楽しい作品になっており、現代社会をも風刺。ボスの大ボウフラにいじめられていたチビボウフラたちが、力を合わせボスを追い出すストーリーです。花柳千代舞踊団のヒット作品で度々再演し、他の舞踊団、劇団からも上演の申し込みが度々ありました。

花柳千代舞踊団のヒット作品で度々再演しました。

「黄泉比良坂」
よもつひらさか

上演日 第七回「花柳千代の会」一九七四年（昭和四十九年・十一月七日）

劇場 国立小劇場

特別出演 花柳寿楽（現・人間国宝）

小沢重雄（民衆舞台）

助演 花柳千代舞踊団 十五名

スタッフ

台本 関 稔

構成 花柳千代

作舞 花柳千代

作曲 牧野由多可

美術 有賀二郎

照明 遠山静雄

備考

古事記の神代史の伊邪那岐、伊邪那美の神話はロマンをかきたてられます。

伊邪那岐に花柳寿楽先生をお迎えしてのこの舞台はスペクタクルで、マーサ・グラハム舞踊団に刺激を受け製作した、思い出のある作品で再演を考えています。

「りようじんひしよくみうた梁塵秘抄組歌」

上演日 第七回「花柳千代の会」一九七四年（昭和四十九年・十一月七日）

劇場 国立小劇場

スタッフ

案 本 田 安 次

台 本 藤 田 圭 雄

作 舞 花 柳 千 代

作 曲 杉 浦 弘 和

作 調 堅 田 喜 三 久

美 術 山 本 武 夫

照 明 遠 山 静 雄

備 考

本田安次先生とお話ししていた時先生が、

「山伏の腰につけたる法螺貝の丁と落ちていと割れ砕けてものを思ふ頃かな」
この歌を千代さんが踊ったらいいと思っていました。と、おっしゃって下さったこと
から「梁塵秘抄組歌」ができました。

一九八一年に、《伝統芸能五人の会》がアメリカUCLAに招かれた時、ロサン
ゼルス、ワシントンDC、ニューヨーク公演に際して、作舞、作曲、作調が同人の
千代、杉浦、堅田氏の作品ですので、これを上演しました。

伝統芸能が主の公演でしたが、三人の創作作品をはからずも発表することができ、
各方面からも好評をいただきました。

◎ 伝統芸能五人の会

能 喜 多 長 世

狂言 野 村 万 作

長唄・三味線 杉 浦 弘 和

鳴物 堅 田 喜 三 久

日本舞踊 花 柳 千 代

第十八回舞踊批評家協会賞受賞（一九八六年・昭和六十一年）

中国の旅

「河西回廊」

上演日 初演 第十回 「花柳千代の会」 一九八六年（昭和六十一年・三月十六日）

再演 第十一回 「花柳千代の会」 一九八八年（昭和六十三年・三月十二日）

劇場 国立小劇場

助演 花柳千代舞踊団 三十五名

日本体育大学研修部 二十名

中国舞踊留学生 刘 浩

スタッフ

案・構成 花柳千代

作 舞 花柳千代

作 詞 海津勝一郎

作 曲 杉浦弘和

美 術 有賀二郎

照 明 遠山静雄

音 響 鳥羽健治（国立劇場）

備 考

一九八五年（昭和六十年）五月三十日から四十八日間、現代舞踊の美二三枝子氏と北京・西安・蘭州・ウルムチ・トルファン・敦煌・南京・上海を舞踊交流で回り、その時の印象を舞踊化しました。終幕には、西域から日本に渡来して奈良の御寺に鎮座する御仏たちが、はるか大陸の流砂の音に耳をかたむけ、御仏の故郷である大陸を想う心を、千代を中心に六人の踊りで表現、静かな中に盛り上がりのある場面になりました。

「大敦煌」

中国文化部・中国芸術研究院榮譽研究員授与記念作品

上演日

第十二回「花柳千代の会」一九九四年（平成六年・三月一日）

劇場

国立大劇場

特別出演

花柳寿楽（人間国宝）

賛助出演

張志翔（北京・中国戲曲学院指導者）

舒桐（北京・中国戲曲学院学生）

包飛（"）

郭永友（"）

張洪義（"）

田震（東京・中国芸術団）

他十名（"）

加賀清孝（バリトン歌手）

日本体育大学研修部学生・十四名

花柳千代舞踊団・三十名

豊島区小学生日本舞踊体験教室の小さい仲間たち・十九名

刈浩こと花柳千代蘭

劉俊驥（北京・中国芸術研究院舞蹈研究所副所長）

特別指導

スタッフ

案・構成 花柳千代

台本 海津勝一郎

作舞 花柳千代

美術 有賀二郎

照明 五明隆夫

音楽構成 山本直

戲曲作舞 田震（東京）

戲曲作舞 張志翔（北京）

武術指導 劉俊驥

特別指導 東山健吾（成城大学教授）

作舞・舞台監督助手 花柳太郎

音楽 喜多嶋修（中国への旅を基に「インマインズウェイ」より）

音楽 三木稔（「巨火」より）

音楽 中能島欣一（「伽藍」より）

一九八五年（昭和六十年）からの中国との交流も十年を迎えました。

その間、中国文化部・中国芸術研究院より名誉研究員の名称を授与され、その記念と日中舞踊交流の十年間の成果として「大敦煌」の製作を一九九二年に計画しました。そして成城大学 東山健吾先生の指導で、敦煌莫高窟の数ある石窟の壁画の中でも歴史絵巻として最も優れた第一五六窟・張議潮出行図を舞踊化することに決めました。中国からは京劇の学生を呼び日中合作の舞台を製作することに決めましたが、三月一日の上演間際になっても北京・戯曲学院の五名、劉俊驥先生、刈浩こと千代蘭のビザがおりず、一時は悲観的な空気が流れました。

その結果、大作「大敦煌」が全員揃ったのは上演三日前でした。又、心配していた戯曲学院の生徒たちの作舞も、戦闘場面も中国の戯曲関係者の演技力で盛り上がり成功しました。平成七年は終戦五十年。この十一月一日に北京で「大敦煌」をテーマに日中舞踊会議が開催されます。公演から一年過ぎた今でも、北京や敦煌では「大敦煌」は日中合作舞踊作品として話題を集めています。

この十月、スタッフが中国に招聘され訪中が決定しました。

その他の作品

民俗芸能より「太鼓のひびき」・「ひるがえる袖」・「寂」・「飲」・「若衆舞」
「ギャマンを持つ女」・「砧」

「唄って踊ろうわらべ唄」より「日本の舞踊」・その中でも「あや取り」「けん玉」の踊りが大好評でした。「夕日の耳」